

天声人語

仕事を抱え込みすぎて胃に潰瘍ができたことがある。記者になつて10年、オウム真理教の公判を担当したころだ。信徒が次から次へと起訴され、廷内外の取材、出稿に追われた▼教祖である松本智津夫被告の法廷では、その声を一言も聞き漏らすまいと耳を傾けた。教団内で「尊師」「グル」などと畏怖された男はしかし、一審の途中からほうけたような態度を見せた▼居眠りをする。股間に指をやる。意味不明の英語を発する。弁護団は「妄想が深刻。裁判の前に治療を」と訴えたが、訴訟能力なしとされることを狙った詐病ではないかと私は疑った▼それ以前は冗舌だった。「オウムの流通管理省は供物を配る。労働省は修行の面倒をみる。出家信徒の命を守るのは防衛庁の役目」。教団を解散させるべきだと迫る公安調査庁に対し、とうとうと反論した姿を覚えている。破壊活動防止法をめぐる弁明手続きの場で、教団がいかに無害か述べ立てた▼麻原彰晃とは何者だったのか。廷内で間近に観察した私には、いまなお小さな扇動家像しか浮かばない。「地下鉄サリン事件は（弟子たちに）ストップを命令したが、彼らに負けた」。公判の当初、臆面もなく責任を転嫁した。罪を悔い、懺悔の涙を流す信徒らとは対照的だった▼死刑の報に接して体が震えた。いま感じるのは、事件の全容がついぞ解明されなかったという徒労感。そして教祖らの一斉執行をもつてしても、次なるカルト教団の暴走を止められないという不安である。

2018・7・7